

ヘロツド。

何でも、この國の半分でも。

サロメ。

お誓ひなさいますのね？

ヘロツド。

誓ふよ、サロメ。

ヘロヂアス。

舞ふのではありませんよ、サロメや。

ヘロツド。

何にかけてお誓ひなさいますの？

サロメ。

命にかけて、おれの冠にかけて、神々にかけてじや。そちが只一度おれのために舞ひさへすれば、お前の望むものは何でも呉れてやる、此國の半分でもくれてやる。サア、サロメ、サロメ、おれの爲に舞うて見せい！

サロメ。

あなたはお誓ひになりましたのねえ。

ヘロツド。

おれは誓つたぞよ、サロメ。

サロメ。

あたしの欲しいものをみんなね、あなたの國の半分でもね。

ヘロヂアス。

サロメや、舞うのではありませんよ。

ヘロツド。

この國の半分でもだよ。そちが此國の半分でも欲しいといふことであるなら、サロメ、そちは女王として、さぞ美しいことであらうぞよ。あれは女王として美しいものではなからうかな？ おゝ！ 此處は寒い！ 氷のやうな風が吹いてる、それから、おゝ、きこえるわ………どうして空で羽音がきこえる

るのだらう？ は、あ、廣場の上の方を飛んでる鳥が、大きな黒い鳥がゐるのかも知れないな。どうしておれに見えないのだらう、此鳥が？ あの羽の音は凄（さい）い音だ。羽ばたきで起る風の音は凄（さい）い音だ。つめたい風だ。いや、さうでない、つめたくない、熱いぞ。おれは息がつまる。おれの手には、水をかけてくれい。食ふから雪をくれい。マントルをぬがせてくれい。早く！ 早く！ マントルをぬがせてくれい。いや、マアほつといてくれ。おれをいためるの

は、この飾環だ、薔薇の飾環だ。花が火のやうだ。おれの額（ひたい）がやけてしまふた。

(頭の上から花環をもぎとつて、テーブルの上（うへ）に投げつける。)

あゝ！ やつと息が出来る。何てあの花瓣の赤いことだ！ 布についた血のやうだ。いやかまやせぬ。眼に見えるものごとに、意味をつけてはならないて、なあ。それじゃ、とても生きちやゐられやせぬ。血の跡（あと）でも、やつぱり薔薇の辨（べん）のやうに立派（りっぱ）なものだ

と、いつた方が増しだらう。なんでもさういつた方が、ずつと増しだて……然しこのことはいふまい。もうおれは愉快じや、非常に愉快じや。おれに愉快であるべき権利がないかね？ お前の娘は、おれのために、これから舞ふところだよ。そちは、おれのために舞うてくれないかね、サロメ？ そちはおれのために舞ふと約束したなあ。

ヘロヂアス。

わたしは舞はせは致しません。

サロメ。

あたしは、あなたのために舞ひますわ。

ヘロツド。

娘の云つたことを、お前は聞いたであるな。あれはこれから、おれのために舞ふところだよ。おれのために舞ふつて、でかしたぞ、サロメ。そしてそちがおれのために舞うたら、欲しいものをくれるとい

ふことを、忘れまいぞよ。そちの欲しいものは何でもやる。此國の半分でもやる。おれは誓をしたのだ、さうじやないか？

サロメ。

あなたはお誓ひなさいましたわ。

ヘロツド。

そしておれは、まだ誓を破つたことはない。おれは誓つたことを守らぬやうな人間ではない。おれは

嘘をつくことを知らぬ。おれは自分の言葉の奴隷だ、そしておれの言葉は國王の言葉だ。カツバドシアの王は、終始嘘をつく、だがおれは本當の國王ではない。おれは臆病者だ。それからまた、おれはおれに金を借りて返さない。おれはおれの使者に無禮さへした。おれは毒舌をはいた。けれども、おれが羅馬へ行つたら、皇帝は磔刑になさるだらう。乞度羅馬皇帝はおれを磔刑になさるだらう。それから、もしさうでないにしても、おれは蛆蟲に食はれて死ぬる

だらう。豫言者がさう云つてゐた。サア！ どうし、
そてちはぐづくするのじや、サロメ？

サロメ。

あたしは女たちが香料と七本のヴェエルをもつて
来て、沓を脱がして呉れるのを、まつてるので御座
いますわ。

(女ども香料と、七本のヴェエルをもつて来て、サロメ
の沓をぬがせる。)

ヘロツド。

あゝ、裸足で舞ふのだな。それはいゝ！ それは
いゝ。そちの小さい足は白鳩のやうだらう。木の上
で舞うてる小さい、白い花のやうだらう。……いや、
いや、あれは血の上で舞ふのだな。そこるところに
は血がこぼれてゐる。血の上で舞うてはならない。
悪い前兆かも知れない。

ヘロデアス。

あれが血の上で舞へば、それがあなたにどうした
といふので御座いますの？ あなたは、その中にす
つよりおはいりなさいましたわ。………

ヘロツド。

それがおれに、どうしたといふのかい？ マア！
月を見い！ 赤うなつた。血のやうに赤うなつた。
はあ！ 本當に豫言者のいつた通りだ。あれは月が

血のやうにならうといつた。さういひはしなかつた
かねえ？ そち達はみんな聞いた筈だ。そして今、
月が血のやうに赤くなつた。そち達には見えなにか
ねえ？

ヘロデアス。

ええ、ええ、わたしにはよく見えますわ、それか
ら星は熟した無花果のやうに落ちるところです、さ
らちや御座いませんか？ それから太陽は髪の毛を

つゝむ袋のやうに黒くなるどころです。それから地上の帝王は恐がつて居ます。その帝王の恐がるのだけは、少くも誰にでも見えますわ、たつた一生に一度だけ、豫言者のいつた通りでしたわ、地上の帝王は恐がつて居ますわ。……奥へまゐりませう。あなたは御病氣で御座いますよ。皆さんは羅馬へ歸つて、あなたが、氣がちがつてると仰つしやるで御座いませう。奥へまゐりませう、ねえ。

ヨカナアンの聲。

エドムから來る此男は誰だ？ 紫に染めた衣を着て、着物の美しさに光り輝いて、ひどく偉らさうにあるいて來る此男は誰だ？ 何のために、そちの衣は緋に染めてあるのぢや？

ヘロヂアス。

奥へまゐりませう。あの男の聲はわたしを氣ちがひに致します。あの男がのべつに、しやべつてる間

は、娘を舞はせはしませぬ。こんな風に、あなたがあれを見つめてゐらつしやる間は、わたしはあれを舞はせはしませぬ。どうしても、わたしは舞はせはしませんわ。

ヘロツド。

立つな、オイ、こりや、立つても何の役にも立ち
はせぬ。あれが舞うてしまふまでは、おれは奥へは
いりはせぬ。舞へ、サロメ、おれのために舞へ。

ヘロヂアス。

舞ふのではありませんよ、サロメや。

サロメ。

サア、あたし舞ひますわ。

(七つのヴェエルの舞を舞ふ。)

ヘロツド。

おゝ！ 見ごとだ！ 見事だ！ あれは、お前の
娘は、おれのために舞うただらうがや、近うよりや、

サロメ、近うよりや、お前に褒美をくれてやるから。おし！ おれは、舞ふたものは充分にしてやる。そちには立派にしてやるぞよ。そちの心に欲しいと思ふものを呉れてやる。何が欲しいのじや？ いつて見い。

サロメ。

(跪まづいて。)

銀の大皿に入れて、すぐもて來させて頂きたら御

座います………

ヘロツド。

(笑つて。)

銀の大皿に？ うむ、よし、銀の皿へだな。あれは可愛らしいことをいつてる、さうではないか？ 銀の大皿の中へ、何が欲しいといふのじやな、オ、可愛い、美しい、サロメや、ユデヤ中の、どの娘よりも美しいサロメや？ 銀の大皿の中へ、何がもて

こさせて欲しいといふのぢやな？ おれに云つて見や。どのやうなものでも、そちに持てこさせてやる。おれの實はそちのものぢや。何じやね、サロメ？

サロメ。

(立ちあがつて。)

ヨカナアンの首ですわ。

ヘロヂアス。

お！ よう、云つたのねえ、サロメや。

ヘロツド。

いや、いや！

ヘロヂアス。

よういつたのねえ、サロメや。

ヘロツド。

いや、いや、サロメ。そちはそれが欲しいのではない。お母さんのいふことなどをきくものではない。お母さんは、いつでも悪いことばかり教えてるのだ。

お母さんなんぞ構ふものではないぞ。

サロメ。

あたしはお母様にかまひはしませぬ。銀の大皿の中へ、ヨカナアンの首を入れて下さいましといふのは、あたし自分の慰のためで御座いますわ。あなたはお誓ひなさいましたわ、陛下。あなた御誓言をなすつたことを、お忘れなさいますな。

ヘロツド。

おれは知つてをる。おれは神々にかけて誓つた。おれはそれをよく知つてをる。然しおれは頼む、サロメ、何かほかのものを望んで呉れ。この國が半分欲しいといつて呉れ、さうすれば、おれはそれをそちにやる。けれど、そちが今呉れると云つたものは、どうぞ欲しいといつて呉れるな。

サロメ。

どうぞ、ヨカナアンの首を下下さいまし。

ヘロツド。

いや、おれはそれが望ましくない。

サロメ。

あなたはお誓ひなさいましたわ、陛下。

ヘロデアス。

さうだ、あなたはお誓ひなさいましたわ。だれもかれも聞いて居ります。あなたは、みんなの前でそれをお誓ひになりましたわ。

ヘロツド。

黙れ！ おれはお前にいつてるのではない。

ヘロデアス。

ヨカナアンの首が欲しいつて、娘はよういひましたわ。あの男はありとあらゆる悪口をわたしに云ひましたわ。わたしに對してとんでもないことを云ひましたわ。あの子が母親を、よう大事にしてること、誰にでも分りますわ。あとへ引くのではないよ、

サロメや、お誓ひなされたのだよ、お誓ひなさつたのだよ。

ヘロツド。

黙れ、おれに物をいふな！……サア、サロメ、しつかりして呉れ。おれはそちに、一度としてつらくはなかつた。いつもそちを可愛がつて居た………
…あんまりそちを可愛がつてゐたかも知らぬ。だから、これ丈はほしいといつて呉れるな。これは物凄

いことだ、おれに呉れるといふのは、恐ろしいことだ。乞度そちは巫山戯てるのだと思ふがね。胴から離れた人間の首といふものは、見ても心地のよくな
いものじや、さうではないかね？ 處女の眼がそんなものを見ようといふのは、穩かなことではない。それを見て、そちにどれ程の樂みがあるのか？ 何にもない。いや、それはそちの欲しいものではない。おれのいふことを聞け。おれは大きな綠玉をもつてゐる、羅馬皇帝の愛人がおれに贈つた、大き

な圓い綠玉じや。そちが此綠玉を眼にあてゝ見ると、非常に遠方にある物事が見える。羅馬皇帝が曲馬に行かれる時には、自分でそんな綠玉をもつて出かけられる。でもおれの綠玉は、それよりもずっと巨いのだ。巨いことはよく分つてるのだ。世界中で一番大きな綠玉だ。そちは欲しいじやろ、どうじやね？それを呉れいといへ、さうすりや、そちに呉れてやる。

サロメ。

ヨカナアンの首を下さいまし。

ヘロツド。

そちはおれのいふことを聞いてゐない。聞いてゐない。我慢して、おれのいふのをきいて見い、サロメ。

サロメ。

ヨカナアンの首をね。

ヘロツド。

いや、いや、そちはそれが欲しくはないのだ。そちはおれをこまらせるために、さういふのだ、おれが今夜ずっとそちを見つめてゐたものだから。本當に、おれは今夜ずっと、そちを見つめてゐた。そちの美しさが、おれを迷はせたのだ。そちの美しさが、おれを堪らなく迷はせた、それでおれは、あんまりそちを見つめたのだ。だが、おれはもうそちを見つめない。物でも人でも、見つめてはならぬものじや。

見つめていゝのは鏡ばかりじや、鏡は影を見せるばかりじやからな。おゝ！ おゝ！ 酒をもて来て呉れい！ おれは渴いた。……サロメ、サロメ仲をよくしよう。サア来や！ ……えと！ 何をいふのだつたかしら？ 何だつたかしら？ おゝ！ 思ひ出した！ ……サロメ——いや、マア、もつと近う寄りや、きこえないかもしれなから——サロメ、そちはおれの白孔雀を知つてゐるな、庭の中で、天人花と高い糸杉の間をあるいてる、あの美

しい白孔雀しろくじやくをな。あれどもの鶮くちはしは、金がぬつてある。食べる穀物こくぶつも金がぬつてある。それから孔雀くじやくの脚あしは紫むらさきに染めてある。あの孔雀くじやくが鳴く時には、雨あめが降る、尾おしりをひろげる時には、天てんに月つきが出る。あの鳥とりは糸杉いとすぎの樹きと、黒い天人花マアツルの間あひだを、二羽宛ふたはづ歩いてゐる。そしてどちらにも、おつきの奴隸ごれいがつけてある。時ときによると樹きを飛び越えることがある。また時ときによると、草くさの中にしやがんだり、池いけのぐるりにしやがんだりする。世よの中にあれほど珍めづらしい鳥とりはない。世界せかいの

帝王ていおうにもあれほど珍めづらしい鳥とりをもつてゐるものはない。乞度羅馬皇帝きとろまでも、あんな奇麗きれいな鳥とりをもつてはおられぬ。おれはあの孔雀くじやくを五十羽いそはほどそちにやらう。そちの行く處ところへは、どこへでもあの鳥とりはついて行くだらう。そしてそちがあの鳥とりの真中まんなかにゐると、大きおほな白雲しろくもの真中まんなかに包つつまれた月のやうだらう。……おれはそれをみんなやらう。おれは百羽ひゃくはばかりもつてゐる。世界中せかいぢゆうにも、おれのもつてゐるやうな孔雀くじやくをもつた國王こくわうは一人ひとりもないのだ。然しかしおれはそれをみん

なそちにやらう。たゞ、そちはおれの誓をゆるしてくれなくては、そしておれに今呉れるといったものを、呉れいといつてはならぬぞよ。

(國王酒をのみ干す。)

サロメ。

ヨカナアンの首を下さいますし。

ヘロヂアス。

よう云つたのね、サロメや！ あなたと云へば、

孔雀では馬鹿になつてゐらつしやいますのね。

ヘロツド。

黙れ！ いつもお前は、いつもほざいてる。猛獸のやうにほざいてる。ならんぞ。お前の聲には、おれは退屈してしまふ。黙つとれといふに………サロメ、そちのしてることを考へて見い。此男はひよつとすると、神の御使かも知れぬ。神の指は此男に觸つたのだ。神が恐ろしい言葉を、あの口に入れた

のだ。宮殿の中でも、砂漠の中と同じ様に、神がしよつちう、あの男と一所にをられるのだ。……少くもさうであるかも知れぬ。誰にだつて分るものではない。神があつた男を助けて、一所に居るといふことはなにも限らぬ。それに又、あの男を殺したとになると、何かの不幸があつたに起つて来ないともいへぬ。兎に角自分の死ぬる日には、誰かに禍が起るだらうと、あの男もいふて居た。その禍を蒙る人は、おれより他のものではあるまい。思ふても見るがい

、おれは此處へ来る時に血を踏みすべつた。そして又、空では羽の音、大きな羽の音のするのを聞いた。みんな至つて悪い前兆だ、それからまだ他にもあるかも知れぬ。おれは見はしないけれど、乞度まだ他にもあるかも知れぬ。のう、サロメ、おれに禍の起つて来るのを、そちも望みはすまいね？ そちも、それを望みはすまい。さうすりや、おれのいふことをきいて呉れい。

サロメ。

ヨカナアンの首を下さいまし。

ヘロツド。

おし！ そちはおれのいふことを聴かないのだな。静かにせい。おれは——おれは落ついで居る。おれは落つき拂つてゐる。きいてくれ。おれは此宮殿の中に、寶ものをかくしてゐる——そちのお母さんでもまだ一度も見たことのない寶だ、びつくりす

るやうな寶だ。四列にならべた眞珠のカラーをもつて居る。銀の光で月をつなぎ合せたやうなカラーだ。月を五十も金の網の中に引っかけたやうだ。ごつかの女王が、象牙のやうな胸の上につけて居たものだ。そちがそれをつけると、女王のやうに美しからう。おれは二通りの紫水晶をもつてゐる。黒い方は葡萄酒のやうだし、赤い方は水を割つた葡萄酒のやうだ。おれは、虎の眼のやうな黄色いのやら、山鳩の眼のやうな赤いのやら、それから猫の眼のやうな緑のや

ら、いろんな黄玉をもつてゐる。おれは、しよつち
う、氷のやうな焰で炎えて居る蛋白石をもつてゐる。
影の恐ろしい、人の心を悲しうさせる蛋白石をもつ
てゐる。おれは死んだ女の眼の球のやうな、瑪瑙を
もつてゐる。おれは、月が變れば色が變つて、日に
あてると色が褪める月長石をもつてゐる。卵石のや
うな大きな、青い花のやうな、青い青玉もつてゐ
る。その玉の中には波が立つてゐて、その波の青い
色は、月に照らしても色の變はるやうなことはない。

おれは、貴橄欖石も、綠柱玉も、綠玉髓も、紅寶玉
も持つてゐる。赤縞瑪瑙も、風信子石も、白瑪瑙も、
持つてゐる。おれはみんなそれをそちにやつて、そ
れからまた、他のものも添えてやる。印度の國王は、
たつた今、鸚鵡の羽で、こさへた扇を四本贈つて呉
れた。それからヌミヂアの王は蛇鳥の羽の着物を贈
つて呉れた。おれは、女の見ることをとめられてゐ
る、若い男は鞭で打たれてからでなければ見てはな
らない水晶を一つ持つてゐる。おれは青貝の箱の中

に、珍らしい土耳其玉を三つもつてゐる。それを額につけてゐると、ないものを想像することが出来る。手にもつてゐると、女を石女にすることが出来る。みんな金で買はれぬ寶ものだ。値ぶみの出来ない寶ものだ。けれども、これ丈でみんなではない。黒檀の箱の中には、金の林檎のやうな、琥珀のコップが二つある。此コップの中へ敵が毒を盛りでもすると、それが銀の林檎のやうになるのだ。琥珀張の箱の中には、硝子張りの沓が入れてある。セレスの國

からとりよせたマントもあるユウフラテスの市からとつた夜光珠や、深緑玉で飾つた腕環もある………：これより以上に何が欲しいか？ サロメ。そちの欲しいものをいつて見い、おれは、それをそちにやる。たつた一つさへどければ、そちが呉れいといふものは何でもやる。たつた一つは生命さへどけたら、おれのものなら、何でも呉れてやる。司祭の僧のマントでもやる。祭壇の帳でもそちにやる。

猶太人等。

オオヤ！ オオヤ！

サロメ。

ヨカナアンの首を下さいまし。

ヘロツド。

(背を椅子に倚せかけて。)

あれが欲しいといふものを呉れてやれい！ 本當

にあの子は母親の子だ！

(第一の兵士近づく。ヘロチアス國王の手から死の指環をぬいて、兵士に渡す。兵士はすぐにそれを首斬役に渡す。首斬役びつくりしてゐる。)

誰がおれの指環をとつたのだ？ おれの右手には指環があつた。誰がおれの酒を飲んだのだ？ おれのコップには酒があつた。酒が一杯あつた。だれか飲んだのだな！ おし！ 確かになにかの禍が、誰かの身に落ちかゝるだらう。

(首斬役水溜の中へ下りて行く。)

お、何のために、おれは誓をしたの？ 國
王といふものは決して誓言などをするものではない。
これを守らなければ恐いし、さらばといつて守れば、
矢張恐ろしい。

ヘロヂアス。

娘はよくでかしましたわ。

ヘロツド。

乞度何かの禍が起るだらう。

サロメ。

(水溜によりかよりて耳をよせる。)

ちつとも音がしない。何も聞えないわ。どうして、
此人は聲をたてないの？ マア！ あたしを殺
さうとするものでもあつたら、聲を立てゝやるわ、
争つてやるわ、まけてゐやしないわ。……おやり
よ、おやりよ、ナアマンや、おやりよ、いゝかえ。
……いや、何にも聞えない。ひつそりしてる、恐
ろしくひつそりしてるわ。アテ！ 何だか落つこち

た。何だか落つこつた音がしたわ。首斬りの劍だわ。あの奴隷、恐がつてるのだ。自分の劍をおつことしたのだ。思ひきつて殺せないのだわ。此奴隷、臆病ものだわ！ 兵卒をやつて見よう。

(ヘロヂアスの扈従を見て呼びかける。)

サア、こゝへおいで、お前はさつき死んだ人の友達だつたのね、さうじやなくつて？ サア、いゝかえ、まだ死に人が足りないのだよ。兵卒達のところへ行つてね、下りて、あたしにもつて来るように云つて

お呉れ、あたしの貰ふものを、陛下があたしに下さつたものを、あたしの物をね。

(扈従恐れて後すざりする。サロメ兵士の方へ向いて。)

此處へおいで、兵卒たち。お前達此水溜へ下りて行つてね、あの人の首をもつて来てお呉れ。

(兵卒じりくさあさしざりする。)

陛下、陛下、あなたの兵卒に云ひつけて、ヨカナアンの首をもてこさせて下さいました。

(大いなる黒き腕、首斬役の腕が、ヨカナアンの首を

銀の桶にのせて、水溜から出て来る。サロメそれを
 握み取る。ヘロツド上着で顔をかくす。ヘロデアス
 笑つて、扇をつかつて居る。ナザレ人等跪まついて
 祈り始む。

お前は、この口にキスさせなかつたのね、ヨカナア
 ンや。サア！ あたし今キスしてやるわ。熟した果
 物を噛むやうに、あたしの歯で食いついてやるわ。
 さうだ、あたし、お前の口にキスするのよ。ヨカナ
 アンや。あたし前にさういつたのだよ、言やしなか

つたの？ いつたのだよ。お！ あたし今キスし
 てやるよ。……でも、どうしてお前は、あたしを
 見なかつたのね、ヨカナアンや？ お前の眼は随分
 恐かつたよ、随分怒つて、輕蔑して居たのね、その
 眼が今瞑つてるのね。どうして瞑つてるの？ 眼を
 おあけよ！ 險をお上よ、ヨカナアンや！ どうし
 て、お前もうあたしを見ないの？ お前恐いの、ヨ
 カナアンや、それであたしを見ないの？ ……そ
 れから、毒を出す赤い蛇のやうだつた。お前の舌ね、

その舌も、もう動かないのね。もう今は何もいはないのね、ヨカナアンや、あたしに毒を吐きかけたあの眞赤な毒蛇も、もう何にもいはないのね。可笑しいわねえ、さうじゃないの？ あの赤い毒蛇がもう動かないつて、マアどうしたのね？ ……お前はあたしの、何でも嫌つたのね、ヨカナアンや。あたしを刎ねつけたのね。お前はあたしに悪口ついたのね。お前はあたしを賣女のやうに、淫奔者のやうにあつかつたのね。あたしを、このサロメを、へロチアス

の娘を、ユデアの王女をね！ マア、ヨカナアンや、あたしはまだ生きてるのよ、でもお前は、お前は死んでるのよ、そしてお前の首はあたしのもものだよ。あたし今何でも思ふ通りに出来るのよ。あたしは今、お前の首を犬に投げてやることも出来れば、空をどぶ鳥に放つてやることも出来るのよ。犬が放つてにげたら、空の鳥が来てたべるだらうわ。……ねえ、ヨカナアンや、ヨカナアンや、お前は、あたしが愛しいと思つた、たつた一人の男だつたのよ。他の男

はあたし、みんなきらひなのだよ。マア、お前は、お前は美しかつたわねえ！ お前の體は、銀の臺の上につけた、象牙の柱のやうだつたわ。鳩がごつさり居て、白百合の一杯さいた花園だつたわ。象牙の楯でかざつた銀の塔だつたわ。お前の體のやうな白いものは、世の中に何もなかつたわ。お前の髪の毛のやうな黒いものは、世の中に何もなかつたわ。世界中にも、お前の口のやうな赤いものは何もなかつたわ。お前の聲は、不思議な香りをたてる香爐だつたわ。

つたわ、そしてお前を見ると、あたしには不思議な音楽が聞えたのだよ。マア、どうしてお前はあたしを見なかつたのねえ、ヨカナアンや？ 自分の手と悪口との後ろに、お前は顔を隠したのね。自分の神を見たがつてるものゝ布をとつて、お前は自分の眼をかくしたのね。マア、お前は自分の神を見たけど、ヨカナアンや、それでも、あたしを、あたしを、どうしても見なかつたのね。もしお前があたしを見たら、あたしを愛しただらうにね。あたしは、あたし

はお前を見たのよ。ヨカナアンや、そしてお前を愛しいと思つたのよ。おし、どんなにあたしはお前を愛しいと思つたことだらう！ あたしはまだ、お前を愛しいと思つてるのよ、ヨカナアンや、あたしは、お前ばかりを愛しいと思つてるのだよ。……あたしはお前の美しさに焦れてるのだよ。あたしはお前の體にかつえてるのだよ。酒だつて、果物だつて、あたしの渴きと饑とを、いやすことは出来ないのだよ。あたしは、まあ、どうしたらいいのだらうねえ、

ヨカナアンや！ 洪水だつて、海の水だつて、あたしの胸の火を消すことは出来ないんだわ。あたしは王女だつたのよ、それであつて、お前はあたしを輕蔑したのね。あたしは處女だつたのよ、それなのに、お前はその貞潔をあたしからとつてしまつたのだよ。あたしは潔白だつたのよ、それなのに、お前は、あたしの血管に火をつぎこんだのだわ。……ええ！ ええ！ どうしてお前はあたしを見てくれなかつたのねえ、ヨカナアンや？ 若しあたしを見てくれた

ら、お前あたしを愛してくれたらうにねえ。乞度お前あたしを愛してくれたらうし、それに戀の秘密の方が、死の秘密よりか、ずっと大きいといふことは、あたしよく知つてるのだよ。人間の考へるべきことつたら、戀より外には何にもないんだもの。

ヘロツド。

あれは化物だ、お前の娘は全く化物だ。本當にあれのしたことは大きな罪惡だ。わからない神に對し

て、乞度罪惡だ。

ヘロヂアス。

わたしは、娘のいたしたことを、満足に思ひますわ。だから、わたしはもう此處に居りますわ。

ヘロツド。

(立つて。)

はあ！それが同族相婚の妻の詞だな！行かう！おれは此處にゐたくない。こりや、行かう！乞度、

何か恐いことが起つて來るだらう。マナツセエ、イツサカアル、オジアス、炬火を消せ。おれは何物をも見たくない。何物にもおれを見させたくない。炬火を消せ！ 月を隠せ！ 星を隠せ！ 一處に奥へ隠れてしまはう、へロヂアス。おれは恐くなりだした。

(奴隸等炬火を消す。星姿をかくす。大きな黒雲が月を蔽ひ、月全く隠る、舞臺甚しく暗くなる。國王階段を上りかける。)

サロメの聲。

お！ あたしはお前の口をキスしたよ、ヨカナアンや、あたしはお前の口をキスしたよ。お前の口は苦かつたわ。血の味だつたの？……いや、ひよつとすると血の味だわ。……戀は苦いものだといふことだつたわ。……だつて、それがどうしたの？ それがどうしたの？ あたしはお前の口をキスしたのだよ、ヨカナアンや。

(月の光サロメの上に落ちて、明るく王女を照らす。)

ヘロツド。

(振り向いて、サロメを見て。)

あの女を殺してしまへ！

(兵士等進み出て、楯をもつて、ユデアの王女、ヘロ
ヂアスの娘、サロメを壓殺す。)

幕。

ワイルド小傳

オスカア・オフラハアチイ・ウイルス・ワイルドは、一八五六年愛蘭のダブリンに生れ、兩親共に名家の出にて、母ワイルド夫人は閨秀文學者として可成の名があつた人である。ワイルドはイイトンのロイヤル・スクウルや、ダブリンのトリニチイ・カレッジを経て後、牛津大學に入り、一八七八年に學位を得た。彼が牛津に於ける生活は極めて贅澤な放肆なものであつて、其智識と美とに對する熱情と、自由生活に對する大膽な態度とは、頗る強烈なものであつた結果として、彼は當時英國詩壇の異色であつたラスキ

ン、ロセツチ、井リアム・モオリス及バアン・ジョオンス等の主宰せる唯美主義の運動に加はり、自ら之が頭領たらんとするがワイルドの野心であつた。一八七六年には彼は希臘パレスタイン伊太利地方に旅行し、七八年には牛津大學にて詩「ラヴエンナ」によりてニウヂゲエト賞金を得、八一年には「オスカア、ワイルドの詩」と題して詩集を公にし、毀譽褒貶の間に、兎も角も最も特色ある唯美派の青年詩人として認めらるゝに至つた。

けれども同じ唯美派といつても、ワイルドの憧憬

する所の唯美的生活は、決してロセツチや、スピン
 バアンなどに見るのが如き官能的肉感的暗示的なも
 のではなくして、寧ろ極端に現實を離れて「所謂誇
 張的隠喩や古代俚謠の衣をきせた、技巧的な遊離的」
 な生活であつた。爰に於てか功利的と實際的といふ
 ことの外には何物も眼中になき米國人等が、唯美派
 を攻撃して盛にワイルド一派を嘲笑諷刺せるを見る
 や、ワイルドは直に眞の唯美派を傳へんとして八二
 年米國に渡り、紐育ボストン其他に於て、「英國の文
 藝復興」と題して巡廻講演を行ふこと前後二百回以

上に及び、美の鑑賞を以て人生最高の目的とするネ
 オ・ヘレニズム及びネオ・ロマンチズムを盛に唱
 導したが、其結果は依然として反感と冷笑の二語を
 以て盡すべきものであつた。

二年間の講演旅行を終つて歸國した後、に於ても、
 ワイルドは依然として現實生活からかけ離れた華奢
 な閑雅な放縱なる生活に一身を投じ、軽い淡々しい
 一個の色彩の中に人生の萬象を包みこんで見て居る
 のであつた。

米國滞在の間に於て脚本を書く彼は、歸國

の後 Happy Prince and Other Tales (1888) & Lord Arthur Savile's Crime and Other Stories を始めとして、其小説中最も傑出せる The Picture of Dorian Gray など公にし、一八九〇年に至りては、ワイルドの名聲漸く世を騒がすものあり、ついで燦然として暗示に留める論集 Intentions (一八九一年) を公にし、同じ年紐育に於ては The Duchess of Padua が上場せられ、九二年に公にされた Lady Windermere's Fan (一八九四年出版) は始めて彼が脚本作家としての成功を傳へたものであつた。之についで A Woman of No Importance (一八九三年

出版) The Ideal Husband (一八九五年上場) The Importance of Being Earnest (一八九五年上場) 九九年始めて出版) Salome (一八九二年) 等相ついであらはれ、ワイルドの人氣は殆んど一世を壓するの觀があつたが、九十五年三月クインズベリイ侯爵に對して、淫猥不遜な行爲を敢てした罪によりて、二年の間獄裡に苦役を營まざるべからざることとなつてより、これまでの人氣は一朝にして雲の如く消えてしまつて、一世を擧げて嘲笑惡罵を彼に浴せかけたのであつた。所謂「獄中記」の名に知られた、彼が最後の

散文 De Profundis (一八九七年) は、實に此間に成つたものである。

二年間の苦役を終つて、ワイルドが再び娑婆の人となつた時には、彼に對する英國國民の態度は、その入獄前とは全く違つたものであつた。彼は即ち社會の迫害を脱せんとして佛國に逃れ、ノルマンデイの海岸ベルネバル海水浴場にかくれて、兎も角も残りの財産をあてに猶贅澤な生活をつゞけて居つたが、間もなく此地を去つて伊太利のナポリに移つた頃には、彼は頗る窮迫の境に在り、更に數月にして巴

里に引返へしての後は、彼は貧困の爲に殆んど素裸のやうにまでなつて、僅かにとある屋根裏の一間に佗びすむ身とはなつたが、猶彼は最後の努力によりて名聲の挽回を計らんとするの念禁じがたきものあり、彼が最後の長詩にして傑作の一たるリイディング獄舎の歌 Ballads of Reading Goal (一八九八年) は實に落魄の此數年の間に成つたものである。けれども此時に於けるワイルドは、創作の力も元氣も最早つきて了つて、到底如何ともすべからず、僅かに友人の助によりて生きつゝ、コニヤツク酒の力をかりて消

えんととする生の餘燼をもやしながら、あはれむべき憔悴とやるせなき苦惱との間に、一九〇〇年を以て、巴里の魔窟の宿屋の一室に誰一人かしづくものなき惨めな終焉を遂げたことは、ワイルドの死状と題して、當時の英佛新聞紙のセンセイショナルな讀物の一つであつたと傳へられて居る。富裕な貴族的な華かな生活の中に近代的唯美主義をまのあたりに體現した代表的デカダンであり、官能的肉體的快樂主義者であつた彼の半生に比するに、其餘りに數奇の運命に弄ばれた、悲惨であり、寂寞であつた彼の晩年

を以てすると、ワイルドの一生は彼の所謂「現代社會に對する味ふべき一個の象徴」であることが分らう。

サロメについて

ていつにメロサ

戯曲サロメは、一八九一年から二年にかけての冬、ワイルドが英國のトルケエにある間の作にて、あれは女優サラ・ベルナルの爲に作つたものだとは、よく聞くところであるが、其實決してサラ・ベルナルの爲に書いたものでもなければ、決して始から板にのせるなんぞといふ考で書いたものでもないことは、後にあげるところのワイルドの語によりても、立派に之を知ることが出来る。それからまた、サロメは最初から佛蘭西語で書かれたもので、大抵の人

の相像するやうに、ワイルドは再び之れを英語に書き直すなどいふ愚なことをしたこともなければ、始めに英語で書いて、上場が出来ないので、後に佛語に書き直したのでもないことは、ジイ・チエスタアトンの云つて居る通りである。

一九一〇年十二月に、スツラウスがカゼント・ガアヅンに於て上場したワイルドの歌劇サロメは、立派な詩形をとつたものであるが、ワイルドが始めて佛文でかいたのは、勿論英譯と同じく散文である。そしてオペラのサロメは餘りに長過ぎるからと云つ

て、スツラウスがいゝ頃に切つたもので、ヘド井ヒ・ラハママン夫人の獨逸譯から取つたものである。佛文のオペラの方も、ワイルドの原作から直接に取つたものではなくて、スツラウスの樂譜にあはせた獨逸語から翻譯したものであるから、批評家の間にはなかく文句のあるものである。

二

ワイルドが此作に筆をとるに先つて、巴里に於て、同じ題目をとり扱つたグスタアフ・モロオの名畫を見たといふことは、ワイルドに對してヒントを與へ

たものであることはいふまでもない。其他フロオベ
ルのヘロヂアス物語なども、ワイルドに對して影響
を與へると同時に、メエテルリンクなども多少の影
響あつたものと云はれ、そのまたメエテルリンクは、
メリイ・マグダレンを書くに於て、サロメの影響を
受けて居るといはれて居る。何をいつても此サロメ
が聖書中の物語を参考して成つたものであるとはい
ふまでもないが、ワイルドはヘロド大王といふ人物を
造りあげる爲に、ヘロド・アンチバスト、ヘロド大
王と、ヘロド・アグリツパ第一世の三人をば、わざ

ぐごちやぐに於て居るといふことを忘れてはな
らぬ。それから豫言者ヨカナアンといふのは勿論ジ
ヨン・ザ・バプチストのことで、ヨカナアンといふ
語がヒブリウ語であることは、知らぬ人は少ないこ
とであらう。

三

サラ・ベルナル夫人とワイルドとは、早くから
の相識である。夫人が倫敦にあつて登場して居る場
合には、其何れの劇場たるを問はず必ず出かけて行
つて見る。これは實にワイルドの習慣とする所であ

つた。一八九二年の一日ベルナル夫人はワイルドに會して、自分の爲に脚本を一つ書いて貰ひたいことを述べた。ワイルドの或る作が、既に立派な成功を以て迎へられて居たからである。ワイルドは即ち冗談に、既に夫人の爲にサロメを書いて居ると答へた。聖書に關係したものをば、英國の劇場では上場することが出来ないことになつて居るといふことを知らないでか、それともうっかりして忘れてか、ベルナル夫人は是非に其稿本が見たいことを主張し、直ぐにも上場せんと決心して、まもなくその稽古に

取かゝつた。稽古が出来上つて、さて型の如く出願に及んで見ると、ロオド・チャンバレン内閣の脚本検閲官は、ごつこいそれはならぬといふ。斯くと聞いたワイルドは、直ちに自分の國籍を變じて佛蘭西人になることを公言した。畫家バアナアド・バアツリツヂは、直ちに佛軍の召集に應じて行くワイルドを、ポンチ畫にして倫敦の『ポンチ』に載せた。それが丁度一八九二年の七月九日であつた。

此作が出来あがつた翌年即ち一八九三年に至つて、サロメは始めて上梓された。倫敦ではエルキン・マ

シウス・アンド・ジョン・レエンから、巴里ではリ
 プレエル・ド・ラル・アンデパンダンから、而もそ
 れがどちらも佛蘭西語で殆んど同時に出版された。
 大抵の新聞雑誌は筆を揃へて之を非難攻撃し、批評
 家の多くは皆、之では検閲官の態度も無理はないと
 云つた。いつもく評判の悪い検閲官も此時ほど人
 氣のあつたことはなかつた。かうした色んな攻撃の
 中にありて、井リアム・アアチャア氏のみは獨りブ
 ラツク・アンド・ホワイト紙上に於て之を稱讚した。
 『サロメの中には、少くも非常に澤山な音樂的の

分子と繪畫的の分子が含まれて居る。文章の柔
 かさを犠牲にしないで、しつかりした詩的の組
 織を與へることが出来たのは、ワイルド氏が音
 樂から借りたところの方法であつた。此點から
 いふと自分はメエテルリンク氏のやり方を思出
 すことも出来る。……けれどもワイルド氏の
 作中には、メエテルリンク氏の作中に於けるよ
 りも一層の深さと實質とがある。ワイルド氏の
 人物は、ぼんやりした月光や霧のやうな形をし
 たものではなくて、立派な男であり、女である。

氏の有する所のものは更に一層の變化があつて、又それほごコンヴェンショナルなものではない。氏の……パレットは限りもなく遙かに豊富なものである。メエテルリンク氏は水彩畫の繪の具をつかつて繪をかくに反して、ワイルド氏は油畫の深みと輝きに到達して居る。サロメには、大なる歴史畫の性質、銜學の性質、豫期された風俗の性質、斯うした有ゆる性質が備はつて居るのである。——ブラツク・アンド・ホワイト、一八九三年三月十一日。

以上は即ちアチャア氏のサロメ推讚の辭の大略にて、その遠からずしてサロメが歌劇化せられた點に見ても、その他の諸點に於ても、アチャア氏は確かに先見の明をもつて居たと云へるのである。

四

それから一八九三年の二月倫敦タイムス紙が、ワイルドはベルナル夫人の爲に佛蘭西劇をかくことが出来るといつて、サロメを悪評したに對しては、ワイルドは次のやうな返事を三月二日のタイムス紙上に公にして居る。

先週御発表になつた、サロメの批評を拜見しました。私の書いた佛蘭西語の一作に對する英國批評家の見解は、勿論私にとりては殆んど何の關係もないものでありますけれども、御批評中にあらはれた誤謬を訂正させて頂きたいと思つて、今こゝに一言申しあげます。

現時の劇壇に於ける最も偉大な悲劇女優が、私の脚本を見て大變な立派なものと思つて、ごうかしてそれを上場したい、そして自分から其中の女主人公となりたいと熱望し、そしてそれに

對して自分の性格の魔力を貸したい、笛のやうな聲の音楽を貸さうとして居る事實、これは實に私にとつては當然誇と喜の源でありました。そしてまたいつまでもさうでありませう。そして藝術の生々とした中心であると同時に、宗教劇の屢演せられた巴里に於て、ベルナル夫人が私の此の脚本を上場するのをば喜んで見て居たいと思つて居ります。けれども私の此の脚本は、如何なる言葉の意味から云つて見ても、決して此大女優の爲にかいたものではありませぬ。

私はまた、如何なる俳優のためにも、女優の爲にも、脚本を書いたことはありませぬ。いや今後に於ても決してそんなことをするやうなことはありません。そんな仕事は文學上に於ける技術家のすることであつて、藝術家のすることではありませぬ。—— ワイルド

こんなことを云つて居るのを見ると、サロメは、ワイルドがベルナル夫人の爲に書いたのだといふことは全然偽であるといはなければならぬ。

五

一八九四年に至りて、マシウス・アンド・レエン社からアルフレッド・ダグラス卿の手によりて成つたサロメの最初の英譯が公にせられた。有名なオ、ブライ・ピアズリーの畫が之に挿入せられた。此書の巻頭に二枚かきつけたのがその一部分である。一般の人々は此ピアズリーの畫に對して色んな悪評をあげかけたが、實際に於て鑑賞の眼識を有するものはピアズリーの此繪畫を以て特殊の藝能の最高の成功であるとして賞讃し、脚本そのものよりも一時は

繪の方が大評判であつた。此等のピアズリーの繪は全部で十六枚より成り、何れも一種の皮肉な滑稽趣味を帯びた、裝飾的な、變つた趣味のあるものであるが、就中ワイルドの態度の最もよく現はれて居るのは、『月の中の女』といふのと「ヘロチアス女王登場」といふ二つである。云はれて居るが、今は劇の方の立場からして最も面白かるべき二枚のみを巻頭にかしげることにした。

六

一八九六年、ワイルドがまだ入獄中に於て、サロ

メは、詩人にして俳優たるルニエ・ボエによりて巴里のラアヴル劇場に上場せられた。其結果は甚だ歓迎されぬものであつたが、其上場をきいたワイルドの喜びは甚だしいものであつた。やがて一九〇二年十一月五日を以て、サロメは始めて伯林クライナア劇場に於て上場せられ、二百日間の打つ通しで非常な評判を博した。

やがて一九〇五年の五月に至りて、本國の英國では、此劇が公にされてから殆んど十年近くにして、始めて上場された。而もそれがアアチャア街のピチ

ウ劇場に於て、たつた二日間私演として上場されたのであつた。劇評家連の批評は以前にも増して酷烈なものであつた。けれども一九〇六年の七月に至りて、文藝演劇協會は更に之をナショナル・スポーチング俱樂部に於て上場して、烈しき世評と戦つた。けれども此際に於けるロバート・フア嬢のヘロチアス女のヘロド王と、フロレンス・フア嬢のヘロチアス女王の出來榮えとは、聊か世人を驚かすに足るものであつた。之について一九一一年二月に於て三たび上場せられ、サロメは遂に英國劇壇に於ても一般の注

目を引くものとなるに至つたのである、以上は最近のピアズリイ版のサロメ中に收められたロバート・ロス氏の序文中から拔萃した要點であるが、チルソンの百科全書などを見ると、サロメは一八九四年に巴里に於て上場されたと記されて居るに係らず、ロ氏の序文にはそのことが一言も云つてないのは何故であるか、何となく一寸變な氣がするから、それだけを此處に附記して置く。それから猶ウオルター・レットチャア氏の云ふ所によると此劇は既に佛文の原本の外に英獨蘭伊露等各國語に譯され、譯書の種類

四十種以上に上つて居るといふが、最も由緒の正しい佛文の原本は、メスウエン版のワイルド集中に集められたものださうな。

七

「ドリアン・グレイの肖像」がワイルドの小説中最も傑出したものであるに對して、サロメは實に彼が戯曲中の最大傑作であると同時に、彼の生活なり理想なりが最もよく現はれて居るものである。矛盾と虚偽と煩鎖と汚濁とにみちた現實の世界に厭きはてて、只之れ理想的な超現實的な美的な而も官能的な

本能的な生活に憧憬して居るワイルドは、遙かに現實をかけ離れた、原始的な、歴史的な生活の間に、自然のままの題材を發見して、其中に巧に自己の生活と運命と性格と憧憬とを織り込んで、所謂作家の態度の躍如として見はれて居る此篇を完成したのである。作中の人物の運命が即ち作者自らの運命にして、其様々な特色ある人物の性格が、要するに、其本能の衝動によりて、どこまでも突貫せざれば己まざる原始的な性格に似た、彼れ自らの性格その儘であることは當然であらう。

強烈なる火のごとき、自由な本能的な女王サロメが、共に語るに足らぬ自分の周囲の人々に對して悉く愛想をつかしてしまつた折柄、愛するに足るべく語るに足るべき豫言者ヨカナアンを發見して、彼女の炎ゆるが如き好奇的な若々しき戀の焰は如何な勢を以て燃えあがつたことであらう。然も豫言者の冷たき心は一言にして之をはねつけてしまつて、世にも恐ろしい呪ひの言葉をサロメの母たり父たる人に向つてあびせかけた。色を盡し辭をつくして猶遂に其戀の成らざるを見たサロメは、滿身の血を湧き

立たせて叶はぬ戀の恐ろしく凄じき復讐を計畫した。凝りに凝つたる狂ふが如き戀の一念は、血なまぐさき豫言者の唇に與へられた思の儘の接吻によりて見事に復讐されたが、官能的唯美的快樂遂行の報酬は、あはれやその身の悲痛な最後であつた。強烈な自由な火のやうな情熱の終りはやつぱり其性格にふさはしい極みのものであつた。

それから、單に暴虐無道といふよりも、苦勞性な、いら／＼した、迷信的な、神とか世間とかいふものに對して、案外に弱味の多い國王へロツドは、何と

なく一種の同情をひき勝ちな原始的な性格であつて、
 残忍酷薄以外には何物もないといふやうな近代的な
 暴君ではなく、只どこまでも本能に向つて猛進する
 のみの一本調子などいふばかりの、愛すべき所あり、
 何となく世間的な人であると同時に、道理に反し眞
 理に逆つてまでも、どこまでも其欲求を遂行しよう
 とする程のタイラント的な悪人でないことは、その
 いさゝか嫉妬の念にかられつゝも、猶世間の思はく
 を恐れて遂にサロメを壓殺せしめたる行爲にも亦之
 を認められぬでもない。

烙のやうな情熱の塊であるサロメの母たる王妃は
 恐るべき女である。國王でさへ顔をかくして見るこ
 とを敢てせぬヨカナアンの首をも、面のあたりに扇
 扱ひで平氣で見居ることの出来る、死んだ大尉の
 姿さへ眼につかね程、薄情な圖々しい女である。本
 能の強烈なるが上に、感情の冷酷なる彼女は、如何
 なる罪惡をも之を敢てし得る、残忍な、恐ろしい、
 虚榮心の強い女である。彼女の虚榮の爲に、此恐ろ
 しい悲劇は立派な終りをつぐるに至つたのである。
 ヨカナアンの首を斷つことを、娘にすゝめたのも彼

女ではないか。現在吾子の殺さるゝを見つゝも、遂に何の一言をも發しなかつたのも彼女ではないか。彼女の眼の前には肉慾の欲求以外に何物もなく、彼女は只それ原始的な本能的な官能的な、而も何となく超現實的な肉の塊である。

斯うした吾人の赤裸々な原始的官能的唯美的な、本能の欲求に對しては、聖者ヨカナアンの力も遂に何のオオソリチイをも價せずして、彼は徒らに神の名を叫びつゝはかなくも消えてしまはなくてはならぬといふ所に於て、吾等はどうしても作者の狙つた

大きなアイロニーを認めないわけには行かない。然もワイルドの官能的な生活はどこまでも超世間的非現實的といふことを離れない、別に一個の世界を作り出して其所に生きようとする所謂詩的遊離的官能の生活であつて、どこまでも文字通りな現實的な直裁的な官能的なものでなかつたといふことは、自ら此作が吾人に對して一個の興味を供給しつゝも、猶吾人をして何となく物足らぬ感の起るを禁ずる能はざらしむる大なる原因であることを忘れてはならぬ。

それにつけても、昨年さくねんの十一月じゅういちがつウィルキイ一座いさが帝國劇場ていこくげきやうに演じたサロメの一幕一幕、あの時の喜よろこは、どうしても自分じぶんが永久えいきうに忘わすれることの出来よぬ喜びよろこの一つである。あの官能くわんのう的な心持こころもちのいゝ背景はいけいと、ハンタア・ワッツ嬢ぢやうの嗔しやがれたやうな吠ほえるやうな、I will kiss thy mouth とらふ肉にくの聲こゑと、Give me the head of Jokanaan といふ熱情ねつじやうの聲こゑと、醒さめたやうな超現實てうげんじつ的なヨカナアンの落おちつき拂はらつたさびた聲こゑとは、帝劇ていげきの四階よかひから大きな眼まなこをみはつた自分じぶんのいつまでも忘わすれ得えぬ色彩しきさいと音楽おんがくの一つである。

ワイルド著作目録

The Duchess of Padua(劇)	1882
Vera (劇曲)	1883
The Truth of Masks (論説)	1885
Lord Arthur Savile's Crime (小説)	1887
The Canterville Ghost (小説)	1887
The Happy Prince and other Tales (小説)	1888
The Portrait of Mr. W. H. (小説)	1889
Pen, Pencil and Poison (論説)	1889

The Decay of Lying (論說)	1889
The Critic as Artist (論說)	1890
The Soul of Man under Socialism (論說)	1890
The Picture of Dorian Gray (小説)	1890
Salome (劇)	1891
Lady Windermere's Fan (劇)	1892
A Woman of No Importance (劇)	1893
An Ideal Husband (劇)	1895
The Importance of Being Earnest (劇)	1895
The Ballads of Reading Goal (長詩)	1898
De Profundis	(1895—1897)

大正二年六月十二日印刷
大正二年六月十五日發行

定價金四拾錢

近代脚本選

第四卷

サ 口 X

著譯者

若月

保治

東京市神田區南神保町十四番地

發行者

鶴岡

五郎

東京市京橋區新榮町五丁目七番地

印刷者

小林

秀一

東京市神田區南神保町十四番地

發行所

現代

社

振替口座東京二三八三六番
電話本局一四二五番



(行印堂書藝臨編)
(七の五町榮新區橋京)

近代脚本書叢

冊 每	送 料	定 價	珍 袖
頁 百 三 凡	錢 四	錢 拾 四	裝 入 葉 數 眞 寫

第 壹 篇 第 二 篇 第 三 篇 第 四 篇 第 五 篇 第 六 篇

シユニツレル作 森 鷗 外 譯	シ ヨ オ作 楠 山 正 雄 譯	メエテルリンク作 島 村 抱 月 譯	ワイ ル ド 作 若 月 紫 蘭 譯	イ ブ セ ン 作 草 野 柴 二 譯	ストリンドベルク作 島 村 民 藏 譯
戀 愛 三 昧	運 命 の 人	ペレアスとメリサンド	サ ロ メ	海 の 夫 人	伯 爵 令 爵

再 版 發 賣	再 版 發 賣	新 刊 發 賣	新 刊 發 賣	新 刊 發 賣	新 刊 發 賣
---------	---------	---------	---------	---------	---------

274

192

終

